

glass

The UrbanGlass Art Quarterly

サミュエル・フリーマンの角永和夫

文・GLASS Magazineの アニー・バックリー

2008年 秋

開発と衰退の対立する力は、40年近くの間、さまざまなメディアでアーティストの角永の作品の主題でしたが、この探求は、アーティストが1980年代から作っているガラス細工に最も広く関連しています。熱心な研究と深い魅力の両方を利用して、角永はガラスを溶かし、注ぎ、冷却するための独自の自動化プロセスを開発しました。出来上がった彫刻は真面目で空想的です。遠くから見ると、おとぎ話の城の頂上やふわふわのホイップクリームの巨大な塚に似ていますが、間近で見ると瞑想的な品質になります。色、形、光のわずかな変化が、それらを作成するために使用された時間ベースのプロセスのエコーで、縞模様のパターンを波打つ。

各フォームは溶融ガラスとして始まり、多くの場合透明です。一定期間（通常は最大48時間）にわたって徐々に安定した流れで注がれます。最大の破片は1,000ポンドを超え、冷却するのに数か月かかる場合があります。ある種の巣の中に小さなガラスのしずくが付いた球根状の円錐形は、ガラスが熱に反応する方法に大きく依存しています。ロサンゼルスにサミュエルフリーマンギャラリーでは、春に角永で最大のガラス彫刻の4つがパティオギャラリーに展示され、カリフォルニアの空気と太陽の光が密集した光に満ちたフォルムに浸透し、反射することを可能にしました。と彫刻のもろさ。

角永も同様の方法で木、紙、絹にアプローチし、それぞれの素材のプロセスと構造が最終的な形を決定します。このため、彼の作品は、アルテ・ポーヴェラ、プロセスアート、さらにはフルクサスなど、さまざまな西洋の動きに関連付けられています。しかし、角永自身はこれらの動きとは直接関係がなく、彼のプロセスは時間と特異性に対する日本の独特の献身を維持しています。

ガラスを扱う現在のモードを開発する前に、アーティストは長年にわたって材料、その特性、およびガラス製造の力学を研究しました。そのため、注ぎ口自体の自発性は各有機的な形で明らかですが、彼は実験とパフォーマンスから生まれたプロセスではなく、審議と計画から生まれたプロセスです。角永の素材との関係も一種の精神的な作品と誤解されているが、彼の献身はより具体的である。このように、具体とももの派という2つの日本の現代美術運動とより簡単に関連付けることができます。具体美術協会は大阪で始まり、ほとんどの作品は角永が子供の頃の1950年代に完成しました。具体は、パフォーマンスやその他の種類の概念前の作業の先駆けと見なすことができます。たとえば、村上三郎が1955年に制作した、パフォーマンスとマテリアリティの両方を想起させる大きな紙に飛び込んだ作品を見てみましょう。もの派は「物派」と訳され、60~70年代に栄えました。もの派の芸術家と素材との関係は、アルテ・ポーヴェラの芸術家と関係があり、人間と物質との関係に深く投資しています。

角永の作品は、これらの現代美術へのアプローチのそれぞれに共鳴しているが、それでも彼は、彼の経験と物質的な調査から支配的に発展した特異なビジョンである。彼は1946年に日本の石川県で製材所を営む家族に生まれました。彼は家業に参入するのではなく、絵画を学びましたが、最終的にはこれが自分の得意ではないと判断し、木材の実験を始めました。丸太の表面を削り取ることで、彼は丸太の内部構造を明らかにしました。ガラスの彫刻に先行する紙と絹の彼の作品は、同様に思慮深く、プロセス指向のアプローチを採用しています。角永の彫刻は、大小を問わず、それぞれの媒体において、一貫した美と革新の感覚を維持しています。